

## 擁壁についての豆知識 (Part-1 擁壁の種類)

今回より数回にわたって、擁壁をテーマに豆情報をお届けします。近年、造成宅地における沈下被害が多く報告されています。造成宅地での沈下は、敷地の盛土と共に“擁壁の設置”に問題がある場合が多く、このような物件では、擁壁自体の瑕疵か工事の影響なのかなど、事業損失でも問題となる場合があります。

### 【法令上の位置づけ】

建築基準法では、高さ2m以上の擁壁は確認申請の対象となり(基準法 88 条、施行令 138 条)、構造等についてもチェックがなされます。また、宅地造成規制法の規制地域内では、高さ 1m以上の盛土に伴う擁壁は規制を受け(施行令 3 条)、建築基準法よりも厳格に構造等の規定が設けられています。

地震時の被災調査等でも、規制対象となるような擁壁には大きな被害は少なく、問題となるのは規制を受けない高さ2m以下および年代の古い既存不適格の擁壁です。

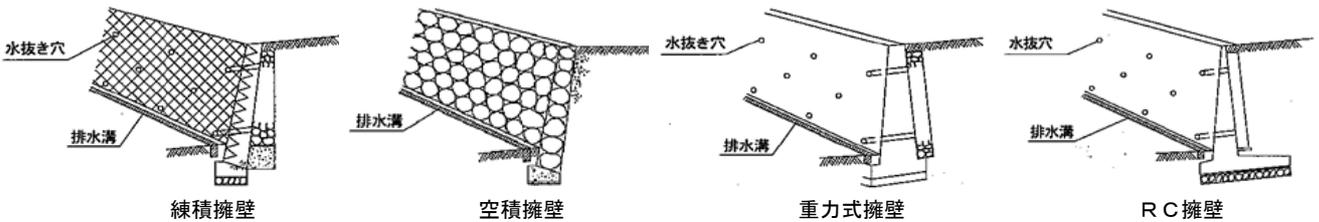
### 【擁壁の種類】

通常の宅地造成等で用いられる擁壁の構造形式を大別すれば以下の4種類だと思われます。また、この他に形状の区分としては、増積み擁壁や二段擁壁等があります。(「宅地擁壁老朽化判定マニュアル」より)

練積擁壁は、背面に裏込を設け間知石(自然石)やブロックをモルタルやコンクリートで積み上げる方法です。これに対して空積擁壁は自然石を積み上げただけ(目地押さえ程度)のものです。重力式擁壁は、背面土圧に対して擁壁の自重のみで抵抗するものです。RC擁壁は、現場打ち又は既製(プレキャスト)鉄筋コンクリートで作られたL型もしくは逆T字型の擁壁です。

重力式とRC擁壁は安定計算により断面を決定しますが、練積擁壁は高さや勾配などにより、経験的に用意された標準断面を採用し、摘要高さは5m以下とされています。(安定性については次回お届けします)

実際の擁壁では、下右写真のように、二段擁壁にさらに増積みした擁壁を見かけることがありますが、地震時等の安全性はもとより、これで宅地が沈下しない方が不思議なくらいです。



間知ブロック練積擁壁



現場打L型RC擁壁



増積み + 二段擁壁

### 【次回予告】

次回は擁壁の安定計算についてご紹介します。